



日本イスパニヤ学会

Asociación Japonesa de Hispanistas

会報第 6 号 / Boletín Núm. 6

2003 年 7 月 15 日 / 15 de julio de 2003

事務局

〒113-8622 東京都文京区本駒込 5-16-9

日本学会事務センター

Tel: 03-5814-5801 Fax: 03-5814-5820

ホームページ: <http://www.nanzan-u.ac.jp/HISPANIA/>

編集局

〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6

京都外国語大学イスパニア語学科(坂東研究室)

Tel: 075-322-6121 Fax: 075-322-6246

巻頭言

吉田 秀太郎 (大阪外国語大学
名誉教授)

D.F.サルミエントはかつてこう言った。「アルゼンチンを悩ませているのはその広大さである」(『ファクンド』)。時は 19 世紀の半ば、イスパノアメリカのロマン主義はその最盛期を迎えていた。独立後初の文学運動であったこの思潮は半世紀近く続いたことでも有名だが、気鋭の思想家や文人たちが国の理想と現実との狭間で苦悩し、その解決に命を賭けた時代でもあった。サルミエントは広大で未開の広野をいかにして文明開化すべきかを考え、亡命地のチリでこの作品を書いた。

ところで、これはかつてラテンアメリカ文学に携わったものとしての他愛もない連想だが、発足後半世紀近くを数えるわが日本イスパニア学会の歩みも、時代こそ違え、イスパノアメリカのこの時期とどこか相通じるものがあるように思える。われわれの直面する学問の世界もその広がりにおいて広大である。地理的にも、イスパニアはもとより、中南米に跨る 20 カ国近い国々の言語や文化、人種構成など、複雑多岐である。近年ようやくこれらの地域に関する研究が着実に行われるようになった。特に文学の面では、キューバ革命を契機とする 1960 年代の、いわゆる「ラテンアメリカ文学のブーム」以来、現代作家や詩人たちの作品紹介と研究に弾みがついて来た。こうして従来経済的な見地からしか見られなかったこの地域が新たな視点から着目されるようになったが、基本的には本格研究はその緒についたばかりと言えよう。イスパニアに関しても、欧米先進諸国の中でも、我が国にとって大方の関心が薄かったこの国については、若干の作品を除いて古今の名作のうち目ぼしいものは殆ど知られることはなった。それがここ 10 年近くうちに系統的に中世文学や黄金時代の文学が精力的に紹介されるようになった。しかしそれでもなお、充たされるべき空間は少なくない。もちろんその空間は一朝一夕にして埋められるものではない。地道に歳月をかけて努力するしかないが、幸い会員の数も次第に増えつつあり、研究の裾野も年を追って広がってゆくに違いない。半世紀前の本学会発足当時を知る一人として筆者の目には、まさに瞠目すべき進展ぶりである。サルミエントが嘆いた広大な大地は、やがてこの国の発展の源となったように、われわれにとってもイスパニア世界の広大さは

かえって豊かな成果をもたらす源となる筈である。今回、おこがましくも巻頭言の執筆を引き受けてしまったが、同学の一人として本学会の今後に大いに期待したい。

追悼・牛島信明先生

立林 良一（同志社大学）

昨年 12 月 13 日に牛島先生が 62 年の生涯を閉じられてから、早いものでもう半年になる。先頃刊行された『スペイン黄金世紀演劇集』や、ちくま文庫版『ボルヘスとわたし』、とりわけ絶筆となった、その短いあとがきを読むにつけ、心の支えを失ったような大きな喪失感があらためて胸の中一杯に広がってくるのを抑えることができない。

先生と初めて出会ったのは私が東京外国語大学へ入学した 1978 年のことであった。早稲田大学から母校へ迎えられたばかりの先生も、伊豆の修善寺で行われた新入生オリエンテーションに同行してくださったのだが、そのときの自己紹介の言葉は今も鮮明に覚えている。先生は愛知県岡崎高校のエースピッチャーとして、甲子園を目指し野球一筋の日々を送った思い出を語られ、「3 年生の夏の地方大会で強豪中京商業に敗れたとき、ぼくの人生は燃え尽きてしまったので、今ここにいるのは燃えかす人間というわけです」というようなことをおっしゃって、「栄冠は君に輝く」を熱唱されたのだ。

しかし、「燃え尽きた」どころか、99 年に刊行された『ドン・キホーテ』の新訳を頂点として、どれほど豊かな業績を残されたかは、スペインとスペイン語に深く関わる私たちの誰もがよく知るところであろう。振り返ってみると、先生にとってセルバンテスは、単なる研究対象を超えて、人生の指針そのものだった。一度は燃え尽きながら、文学というフィールドで再び全力投球されたその生涯は、レパントの海戦で赫々たる武勲をあげながらも、武人としては不遇だったセルバンテスが、『ドン・キホーテ』の作者として不朽の名声を獲得したことと重なり合うように思われてならない。

89 年に出版された『反＝ドン・キホーテ論』を始めとして、先生は独自の方法论と切り口からこの作品を論じ続けてこられたが、そうした研究は総じて牛島訳『ドン・キホーテ』に結晶したと言ってよいだろう。ご自身も巻末の解説で、「今にして思えば、それらはすべて『ドン・キホーテ』全訳のための準備であり、すべてがこの仕事に向けられていたような気がする」と述べておられる。昨年 4 月、琉球大学へ赴任された直後に癌で倒れ、急遽帰京して手術を受けられたが、そのときの医者の診断は、少なくとも 5 年前には発病していたと考えられる、というものだったそうだ。だとするなら、この大部の翻訳を、文字通り自らの命を懸けて完遂なさったと言っても過言ではない。

昨年 7 月にいただいた手紙で初めて病気のことを知らされたのだが、「それにしても沖縄で、これまでとは異なる生活、新たな人生を送りたいと望んでいたところ、まったく新たな人生を賜るとは、神様もなかなかしゃれたことをなさるものだと感じいております」という文面に、先生の中でセルバンテスの精神が見事なまでに血肉化していることを改めて認識させられる思いであった。決して樂觀を許さない病状であ

ると知りながらも、ドン・キホーテのように、あくまで勝利を信じて前向きに病と闘い続けられたと聞かされ、いかにも牛島先生らしい最期であったと思わずにはいられなかった。せめて一度病床にお見舞に伺い、サンチョ・パンサのように、「おいらの言うことを聞いて長生きしておくなさい」と元気づけてさしあげられたならと、返すがえすも心残りではない。今はただ、御霊の永久に安らかならんことを心よりお祈り申し上げるばかりである。先生、どうぞ天国でセルバンテスと心行くまで文学を語り合ってください。

「牛島信明先生を偲ぶ会」報告

竹村 文彦（東京大学）

先生の思い出を語り合うことで、突然であった先生の死を自分自身に納得させ、悲しみを癒すよすがとしたい。そしてこのような思いは、多くの人が共有しているのではない。私たち、牛島信明先生の教え子有志はこうした考えから先生を偲ぶ会を企画した。日時は去る1月25日（土）の午後2時からとし、会場は、先生が24年にわたって教鞭を取られた東京外国語大学内の学生会館をお借りした。私たちの呼びかけに応じ、当日は120名を超える方々がお集まりくださった。大学関係者や出版社の方々、そして教え子たちが中心であったが、牛島ゼミではなかった卒業生の参加も多く、先生がいかに学生から慕われていたかが窺われた。東北や関西方面から駆けつけてくださった方も何人もいた。

天気はよかったものの風の強い日で、立て看板を風に飛ばされないように固定するのに骨が折れた。先生のお好きであったグレゴリオ聖歌が円形の建物内に響き、教会のような雰囲気をもす中、参会者たちは遺影に花を献じていった。会の冒頭で司会の竹村が、先生のお仕事やご病気の経過について報告した。続いてお話をたまわった東京大学名誉教授の増田義郎先生は、牛島先生の翻訳のみごとさに触れられ、「セルバンテスは翻訳を読む味気なさを、タペストリーを裏から眺める行為にたとえているが、牛島さんの訳はわずかな例外のひとつだ」と称えられた。また昨今の日本の状況がセルバンテス時代のスペインに似ていることを指摘され、今『ドン・キホーテ』を読むことの大切さを説かれた。それから献杯に移ったが、ご発声をお願いした東大副学長の高橋正明先生は、あるアルゼンチンの歌手が作った歌の一節、“*Cuando un amigo se va, queda un espacio vacío, que no lo puede llenar la llegada de otro amigo.*”という一節を心を込めて朗読された。ご参会の皆様にしばらく自由にお話をしていただいた後、次の6人の方に牛島先生の思い出を語っていただいた。東外大の同僚であった西永良成先生は、先生のあまりに早すぎる死を惜しまれ、「しかしモンテニュによれば、人と人との最高の交際は書物を通じてのものだ。実際、牛島さんの本を読むと彼の呼吸や声がよみがえる」と話を結ばれた。先生の高校時代からのご友人で中沢乳業顧問の幸村初彦さんは、甲子園をめざして野球に明け暮れていた頃の牛島先生を話題にされた。氏が紹介された昭和33年の朝日新聞によると、「主戦の牛島は頭脳投手で、これでコンスタントな力がつけば充分だ」。幸村さんはさらに、先生がご自身の病気のことを淡々と語っておられたこと、病室では必ずベッドから起き出して応接セットに腰を下ろして氏と対されたことなどを話された。岩波書店編集

者の天野泰明さんは、先生の渡される原稿がいつも非の打ち所のない完成原稿であったことを述べられた上で、翻訳という苦しく空しい作業に先生を向かわせるものは何なのか、という大切な問いを先生に発せずにしたことを残念がられた。国書刊行会編集長の磯崎純一さんは、一度先生と大喧嘩をした逸話を明かされた。それは先生が責任編集をなさっていたシリーズの刊行がある訳者の怠慢で大幅に遅れたときのこと、その際先生は、「本の刊行が遅れるのは、牛島の美学に反する」と憤られたという。東大で先生の教えを受けた慶応大学助教授の石井康史さんは、先生の文学に対する姿勢や、テキストから常に最大値を引き出そうとする緻密な読み方に多くを学んだ、と振り返られた。先生の愛弟子で津田塾大学専任講師の中井博康さんは、先生との出会いが自分の人生を変えたこと、先生に憧れて話し方から立ち居振る舞いまで真似したことなどを語られた。会の終わりに牛島先生の奥様、純子様のご挨拶に立たれた。奥様によると、先生は最後まで前向きの姿勢で病気に立ち向かい、「つらいのはいくらでも辛抱するから、どうか一番有効な治療をしてほしい」と主治医に頼んでおられたという。

牛島先生に亡くなられて、日本のスペイン語文学界が失ったものは計り知れないほど大きい。後に残された私たちは今後、この空白を少しでも埋めるよう努めなければならない。

RAE: *Nuevo tesoro lexicográfico* のことども

清水 憲男（上智大学）

辞書の歴史は剽窃の歴史と言って過言ではない。限りなくコピーに近いものもあれば、先達の成果を巧みに組み合わせる集積させたものもある。版權云々に無頓着な利用者からすれば、とにもかくにも自分の疑問に的確に答えてくれれば、その辞書は差し当たりの役目を果たすことになる。異言語間の語彙を単純に並列させるだけで、さしたる工夫もしていない辞書もあれば、Covarrubias のように文化史ひいては思想史上のヒントさえ提供してくれる辞書もある。

研究が現代西語に限らぬ時、いわゆる古い辞書のお世話になるのが必須なのだが、その多くが絶版で、とりわけ日本にいたのではお手上げの場合が多い。そういう中で最新技術が DVD というメディアを介して実にありがたいものを提供してくれるに至った。RAE の *Nuevo tesoro lexicográfico de la lengua española*, Madrid, Espasa-Calpe, 2001 がそれだ。刊行されてからそれなりの時間が経過したし、西語に関わる者の必須アイテムとして周知でもあり、言語学ましてや語彙論に門外漢の私ごときの的確な紹介は望むべくもない。幸い古今の辞書全般について M. Alvar Ezquerro の *De antiguos y nuevos diccionarios del español*, Madrid, 2002 が出ており、人選間違いで本稿のご依頼をいただいた私に多少なりともできることがあるとすれば、古典を読むのにかなりの辞書にお世話になっている私の個人的な辞書談義程度でしかなく、最終的には今回の 2 枚組 DVD 賛に尽きてしまう。

以前イタリアで M. Fabbri: *A Bibliography of Hispanic Dictionaries* (Imola, 1979) が刊行されると私はすぐに取り寄せてエントリーの豊富さに素直に驚き、某学会の月報に駄文を寄せたことがある。もちろん書誌はしよせん書誌でしかなく、現物

が手元になれば涎を垂らすだけだ。幸い Covarrubias (1611), *Autoridades* (1726-1739), RAE の 1780 年版を初めとする各種辞書の復刻・新版が出されて、中には Covarrubias のように 1943 年の M. de Riquer 版を嚆矢として、1977, 1987, 1994, 1995 年版、さらには 2001 年に同 *Suplemento al Tesoro...* が出たり (1991 年の J. Crespo Hidalgo の Málaga 大刊の博士論文参照)、G. Correas の *Vocabulario de refranes y frases proverbiales* (1627) のように 1924 年版はもとより Bordeaux 刊の 1967 年版、Madrid 刊の 1992, 2000 年などの諸版が出るという幸運に恵まれたものもある (Correas は L. Combet: *Recherches sur le "Refranero" castillan*, Paris, 1971 参照)。あまり注目されなかったようだが、C. Oudin の西仏辞典の 1675 年版復刻 (Paris, 1968) や C. de las Casas の伊西・西伊辞典の 1570 年版復刻 (Madrid, 1988) などにも私自身お世話になっており、恩返しに(?) Oudin は 1660 年 Bruselas 版、las Casas は 1583 年 Sevilla 版を個人所蔵するに至った。

これ以外にも近年の嬉しい現象として、経済的見返りを度外視した復刻・再刊を指摘できる。A. Castro: *Glosarios latino-españoles de la Edad Media*, 1936 (→ Madrid, 1991), B. J. Gallardo: *Diccionario. Apuntes*, 19 世紀 (→ Badajoz, 1996), F. del Rosal: *Diccionario etimológico*, 16, 7 世紀 (→ Madrid, 1992), M. Asín Palacios: *Glosario de voces romances*, 1943 (→ Zaragoza, 1994), E. de Terreros y Pando: *Diccionario castellano*, 1786 (→ Madrid, 1987) 等々がその代表例だ。この中に *Vocabulario de Iapon declarado primero en portvgves*, 1630 (→ 東京, 1972) や Diego Collado: 『西日辞典』, 1631 (→ 京都, 1985) などを加えてよいかも知れない。

こうした古いもので今回の DVD 版に収録されているものもあれば、その性質上収録の対象にならなかったものも少なくない。たとえば個別の作者・文学作品対応のものが後者だ。R. Menéndez Pidal による *El Cid* は言うに及ばず、それなりの問題はあるにせよ、*Libro de buen amor* に関する J. M. Aguado (Madrid, 1929), H. B. Richardson (New Haven, 1930), Berceo に関する D. R. Lanchetas (Madrid, 1900), J. Baro (Boulder, 1987), Cervantes と Lope に関する C. Fernández Gómez (Madrid, それぞれ 1962, 1971), Góngora に関する B. Alemany y Selfa (Madrid, 1930), don Juan Manuel に関する F. Huerta Tejedas (Madrid, 1956), *Libro de Alexandre* に関する L. F. Sas (Madrid, 1976), *Corbacho* に関する A. Steiger (Madrid, 1922-23) などは古典文学に関わる者の必携となっている。ただ、今回の DVD の一般語彙集成の範疇からは外れるが故に当然採録されていない。

中世西語を読む者にとって垂涎的となる次のようなものも、今回の DVD の性格からして採録されていない。R. S. Boggs et al: *Tentative Dictionary of Medieval Spanish* (Chapel Hill, 1946), V. R. B. Oelschläger: *A Medieval Spanish Word-List* (Madison, 1940) などがそうで、私は留学中に R. Lapesa の研究室に幾度となく足を運んで少しずつコピーを取らせていただき、罪悪感を覚えながらも全巻を製本したものだ。

もちろん自分の特殊研究に有益な辞書だけではなく、差し当たり入手しやすく軽便なものを後進に紹介する義務も我々は負っている。どんなにすぐれていようが Corominas-Pascual の語源辞典全 6 巻 (Madrid, 1980-91) を、生活費を切り詰めて買えという勇氣はなかなかないし、アンバランスな M. Alonso (Madrid, 1958, 3 vols.; Salamanca, 1986, 2 vols.) や J. Cejador y Frauca (Madrid, 1929; New York, 1968; Madrid, 1990; Hildesheim, 1996 など) を軽々に推すこともできない。そんな中で R. Jammes-M. T. Mir: *Glosario de voces anotadas en los 100 primeros volúmenes de Clásicos Castalia* (Madrid, 1993) などは入手が容易という意味でも

ありがたい。同じく軽便な B. Sesé: *Vocabulaire de l'espagnol classique* (Paris, 私蔵版は 1975 年 4 版) はことによるとはや入手困難、ましてや C. Fontecha: *Glosario de voces comentadas en ediciones de textos clásicos* (Madrid, 1941) は古書店でも難しくなっているようだ。特に Fontecha は再版が望まれよう。

Nuevo tesoro lexicográfico de la lengua española に戻ろう。2 枚組 DVD には計 66 点の重要な辞書が収録されている。従来の CD-ROM では 30 枚以上を要する分量で、収録語彙は約 300 万語にのぼる。1495 (?) 年の Nebrija から 1992 年の RAE の 21 版にいたる主要西語辞書の集成で、中には 1591 年の R. Percival, 1617 年の J. Minsheu のように現物を拝むことさえ至難なものも少なくないのだからありがたい。かつて S. Gili Gaya が同じく Nebrija から *Autoridades* 第一巻 (1726 年) にいたるまでの 93 点の辞書を集成する壮大な手作業に着手したが、戦争の煽りで頓挫してしまったのはよく知られる。この *Tesoro lexicográfico* (Madrid, 1947) は A-E の語集に限られていて、大判ながら実に引きやすく、私などはいまだにお世話になっている。分冊で刊行されていた本書を今日揃えるのは、古書店巡りをしても、かなり難しくなっているのではなからうか。今回の *Nuevo tesoro lexicográfico...* の表題は先行する Gili Gaya の *Tesoro lexicográfico* に基づくものだ。

今回の *Nuevo tesoro lexicográfico...* がどれほど我々に益するかは各人が活用することで体感するしかなく、その生殺与奪の権は利用者にある。ただこの DVD 刊行をもって、自分が所蔵していた旧版、復刻版が無意味化することはない。Nebrija 一つをとってもそう。なるほど今回の DVD に Nebrija の羅西・西羅の双方が採録 (それぞれ 1495?, 1516 年版) されてはいるものの、その後の版で、時には編者の恣意で中身が改竄されたり、中には誠に有益な「付録」が加わった版もある。その意味でも今回の DVD は言うに及ばず 1973, 1979, 1989 年などの比較的入手しやすい版で事足れりとはならない。ここまで書いたところで、ふと自分の蔵書版をチェックしてみた。西羅は 1754 年 (Matriti), 羅西は 1655 年 (Lugduni), 1735 年 (Hispani), 1792 年 (Matriti), 合本版 2 巻は 1790 年 (Matriti) といった具合で、比較して眺めていると楽しくて時の経つのを忘れる。もちろん Nebrija の辞書の場合、María Lourdes García Macho の記念碑的な 3 巻本 (Hildesheim-Zürich-New York, 1996) で補完されねばならない。

またいわゆる復刻版の場合、企画などに加わった研究者の貴重な研究序文が付加される場合も少なくない。Nebrija や Covarrubias 然りで、前掲の Oudin の西仏辞典復刻は B. Pottier による誠に簡にして要を得た序言を冠している… つまるところ古典の世界に迷い込んでしまった者はなけなしの金と古書の埃をはたきつつ、運よく目指す辞書を発見した時には怪しい笑みを浮かべ、時には復刻版のこれまた怪しい香りを嗅ぎ、ついには DVD を回転させて己の解説が空転するのに苛立つことを宿命とするらしい。

最後にこの場をお借りして、貴重な辞書が最近日本で刊行されたことをご報告させていただく。かつて汽船の船長として七つの海を渡り、現在は港湾博物館に在籍しておいでな遠藤三郎氏が長年の蘊蓄を凝縮された *Diccionario marítimo español-japonés-inglés* (『スペイン語海事辞典』、清水市、2000) がそれだ。大判で 650 ページからの立派なもので、我々素人には到底手におえない分野で素晴らしい仕事をしてくださった同氏に心からの敬意と謝意を表したい。100 部の限定出版ではあるが、一度こういうものが完成すれば、その恩恵に直接・間接的にあずかる者の数ははかりしれない。遠藤氏の無償のご尽力の成果も、一つの *Nuevo tesoro lexicográfico* であるに相違ない。

【学会紹介】

京都セルバンテス懇話会

代表 坂東 省次（京都外国語大学）

1997 年は文豪ミゲル・デ・セルバンテスの生誕 450 周年でした。この年、京都外国語大学では、当時、国際セルバンテス協会の会長であったアルベルト・ブレクア氏（バルセロナ自治大学）やハイメ・フェルナンデス氏（上智大学）らを招いて国際シンポジウム「セルバンテス生誕 450 周年と日西交流」を開催しました。それを契機に、日本でもセルバンテス学会を結成してはどうかという意見が出るなかで、「京都セルバンテス懇話会」が創設されました。その目的は、同会発行の年誌『イスパニア図書』創刊号（1998 年）の編集後記にこう書かれています。

「同会発足の目的は、文豪セルバンテスとその作品の研究に加えて、世界のスペイン語圏の総合的な研究にあります。セルバンテスはスペイン語圏のシンボルというわけです。また、同会が単に研究者だけではなく、スペイン語圏に関心にあるすべての人々の会として末永く続くことを願って、「懇話会」とした。」

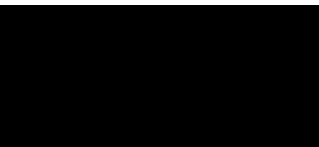
「懇話会」はアカデミックな研究会を目指しただけではなく、全国のスペイン協会あるいはラテンアメリカ協会の協力を得て、協会の会員との交流をも活発に展開してきました。京都で始まった全国大会は鹿児島市、天理大学、札幌市、南山大学を経て今年三月には沖縄は名護市の名桜大学で開催しました。大会で扱うテーマはセルバンテスとその作品を中心に、日本におけるスペイン学の歩み、スペイン料理、スペインワイン、日本とスペインなど実にバラエティーにとんでいます。なかでも、2002 年に南山大学で行ったシンポジウム「フラメンコと日本人」は、日本におけるフラメンコブームの謎の解明に迫るきわめて興味深いイベントとして好評でした。

1997 年に発足した同会は翌 1998 年には年誌『イスパニア図書』を創刊しました。それは本田誠二氏（神田外国語大学）の「詩人としてのセルバンテス」と近藤豊氏（天理大学）の「異界の旅人ガルシア・ロルカー生誕 100 年への鎮魂歌」の二つの論文の他、評論、著者の周辺、書評からなるわずか 75 ページほどの小冊子でしたが、毎年刊行の度にページ数を増やし、2002 年刊行の第 5 号はおおよそ 250 ページを数える雑誌となりました。

また、1998 年には『イスパニア叢書』の刊行も開始し、今年刊行の『スペインの女性群像—その生の軌跡』（イスパニア叢書 10）は、日本におけるスペイン学に新しい境地を開くものとして高く評価されています。

「京都セルバンテス懇話会」では新入会員と『イスパニア図書』の原稿を募集しております。問い合わせは：

京都セルバンテス懇話会事務局



2003 年度第 1 回理事会

日時：2003 年 6 月 1 日 13:00～16:00

場所：モンブランホテル（名古屋駅前） 第二会議室

1. 前回議事録（2002.10.19）を承認。
2. 報告事項
 - 1) 退会者 6 名があった（物故者 3 名を含む。別記参照）。
3. 審議事項
 - 1) 入会申請 7 件を承認（別記参照）。
 - 2) 地域研究学会連絡協議会設立大会について、日本イスパニヤ学会の同大会参加を検討。
 - 3) 2003 年度第 49 回大会の準備、開催要項を審議。現在までの決定事項は以下の通り。

会場：立命館大学「びわこ・くさつキャンパス」
期日：10 月 25 日（土）、26 日（日）
基調講演：José Luis Abellán 氏（マドリード大学）
 - 4) 『HISPÁNICA』について
投稿規程は、各理事の意見を取りまとめ再検討する。
2004 年度の学会創立 50 周年記念大会に向け、CD-ROM 化を実施。バックナンバーの在庫状況を確認の上、CD-ROM 化後は処分を検討。
会員が査読不可能な分野の投稿については、非会員に査読を依頼する。その場合は薄謝を送る。
 - 5) 本年度中に、メールアドレスおよび詳細な専門分野を含む住所録の更新を実施する。10 月初旬に各会員へ変更事項などを問う。
 - 6) 2004 年の学会創立 50 周年記念大会について、開催要項を審議。講演者一名は Víctor García de la Concha 氏に内定。
 - 7) 2002 年度会計決算報告を承認。
 - 8) 本学会のホームページ（<http://wwwsoc.nii.ac.jp/ajh/>）について

【自著紹介】

佐竹謙一著『浮気な国王フェリペ四世の宮廷生活』（岩波書店、2003）

文学を専門とする者がこのような歴史の本を書くのは大変おこがましい話だが、それには次のような理由がある。一つは、教室で17世紀のスペイン文学を講じながら常に思うことだが、スペイン帝国が凋落しつつあったこの時代の「人間」をみるには、文献学のようなテキストを中心とする研究は別として、文学作品を読んだり分析するだけでは不十分で、やはり歴史、宗教、美術なども睨みながら学ぶ必要があるということ。もう一つは、フェリペ4世が無類の芝居好きであり、また絵画にも造詣が深かったことから、スペイン宮廷と演劇と絵画は切っても切れない関係にあったこと。そのうえ、大半の人々の悲惨な生活とは対照的に、度重なる宮廷の豪華な祝宴やかつてない文芸の隆盛を極めた時代に生きたフェリペ4世に関する日本語で書かれた専門書がなかったことも重なり、拙著の誕生へとつながった。以下、岩波書店ホームページの一角にある「筆者からのメッセージ」と内容が多少重なることをお断りした上で、筆を進めさせていただくことにする。

内容を2部構成とし、第1部ではフェリペ4世の生涯、第2部では暗雲ただよう17世紀のスペインに焦点をあてたつもりだが、実をいうと、当初はこの第2部はフェリペ4世の生涯を書くための序章にすぎなかった。だが、書き加えていくうちに内容が徐々に膨み、フェリペ4世の生涯から内容的に独立していったため、最終的には全体を二つに分けざるをえなくなったのである。

フェリペ4世およびこの時代のスペインに関するスペイン語および英語で書かれた書物は意外と数が多い。したがって、何もかもというわけにはいかないの、ここではとりわけ人生の多くの時間を祝宴や観劇、狩猟や恋愛に費やし、肝心の政治を寵臣に任せきったフェリペ4世の放埒な生き様に焦点をあててみることにした。この手の話は、スペイン史概説や一般的な世界史の本ではほとんど語られることはないが、調べ出すときりがない。それでも普通はフェリペ4世のことなど、ページの片隅に追いやられ、たとえ記述があってもせいぜい政治的・経済的な事柄で、それも数行程度で埋められるのが関の山である。確かにこの国王は政治的能力に欠け、政治を寵臣オリバーレスに任せきりで、おまけに意志薄弱な国王であった。曾祖父にあたるカルロス5世や祖父にあたるフェリペ2世にくらべると、新大陸やフランドルやナポリなどを含む、広大なスペイン帝国の舵取り役としてあまりにもお粗末である。ただ、スペイン黄金世紀の文芸（特に文学や美術）の発展に対する貢献度となると、前者の二人とは比べものにならないくらい大きい。なにしろ国王はすぐれた詩才の持ち主であり、また絵画の善し悪しを見抜く慧眼の士でもあったからだ。いや、それ以上に文芸をこよなく愛したといったほうが適切であろう。好きこそ物の上手なれとはこのことである。

しかしながら、「地上の神」もいつまでも放埒な生き様を繰り返すわけにはいかない。寄る年並みには勝てず、体力の減退とともに徐々にこれまでの生き方を後悔し始めることになる。その上、スペイン帝国が悲運に晒されているのは国王たる自分が行いを悔い改めないからだと自分自身を責めることもあった。1643年から65年まで、国王とソル・マリア・デ・アグレダとのあいだで22年間に渡って交わされた往復書簡を読むと、こうした国王の悔いの念が随所に読みとれる。また書簡には、国家の危機や王家の不幸、国王の個人的な懊悩なども赤裸々に綴られていて、歴史にはあまり

表だって書かれることのないフェリペ4世の素顔も垣間見られる。もちろん国王の悔恨の情に実行が伴った試しはないのだが。

こんな国王の人生を描きながら、筆者がもっとも興味を惹かれた点はといえば、バロックのテーマの一つでもある「人生の儚さ」という概念である。これは17世紀のスペインにかぎらず、人間年をとると（とらなくても？）、普通一度は考えてみる事柄だからであろう。この時代の文学作品の中に「ドン・フアン」をテーマとした劇（『セビーリャの色事師』）があるが、このいなせな主人公ドン・フアンは、自分はまだ若いのだから死ぬ間際に懺悔するのはまだ先のことだと考え、反省することなく勝手気ままに人をたぶらかし、あげくの果てに地獄堕ちとなる。フェリペ4世は地獄堕ちになったかどうか知らないが、反省とは口先ばかりで、身体がいうことを利かなくなるまで放埒な生活を繰り返し、スペイン帝国を悲惨な状況に追い込んだうえ、他国の餌食としてしまった人である。今さらいうまでもないが、一国の主がこのような自堕落な生き様を繰り返せば、そのつけはかならず国民にまわってくるのだというよい見本であろう。

そして最後に、没落の一途を辿りつつあったスペイン帝国およびそこに生きる人々の悲惨な暮らしと、気儘なフェリペ4世の宮廷生活とを照らし合わせれば、両者の懸隔が浮き彫りにされるはずである。

【新刊紹介】

『スペインの女性群像—その生の軌跡』（高橋・加藤編、行路社、2003）
を編集して

高橋 博幸（長崎外国語大学）

日本のスペイン語圏研究では今もってラテンアメリカに関する活動のほうが活発のようだ。というのも、「ラテンアメリカの女性についての本を出版する計画があるが、スペインのほうでもやれないか」という誘いが本書出版のそもそものきっかけだったからである。「スペインの社会・政治・文化を理解する上で等閑視できない女性を、西ゴートから現代まで、それも可能な限り多様な職業・社会階層から選択してほしい」という注文であった。

文学領域の、それも極限られた分野の知識しか持ち合わせがない、博覧強記とはまったくもって無縁の身である。思案投げ首。時代と職業を指定してそれぞれの分野の専門家に聞くことにした。やはり餅は餅屋である。人選に窮するほどの名前がリストアップされて戻ってきた。恥かしい話、初耳のものも散見される。その中から文学者、フェミニズム運動家は結構知られた存在なので今回は最小限に抑えて選んだ結果、次のような目次が出来上がった。

- 第一章 中世・近世の女性たち——ゴイスウィンタ、マリア・デ・モリナ、カトリック女王イサベル、ベアトリス・ガリンド、聖女テレサ
- 第二章 近代の女性たち——マリア・ルイサ・デ・パルマ、アグスティナ・デ・アラゴン、マリアナ・ピネーダ、コンセプション・アレナール、ロサリア・デ・カストロ、エミリア・パルド・バサン、マリア・ゲレロ
- 第三章 内戦時代の女性たち——パストーラ・パボン・クルス、ドロレス・イバルリ、マリア・モリネル、マリア・テレサ・レオン、マリア・サンブラーノ、アナ・マリア・ダリ
- 第四章 現代の女性たち——ロラ・フローレス、ヨイエス、イサベル・プレイスレル、王妃ソフィア、クリスティナ・サンチュス

文学者、学者、フェミニズム運動家は言うに及ばず、王妃、宮廷女官、政治活動家、軍人、テロリスト、女優、タレント、歌手、ダンサー、闘牛士……、結構幅広い職層から選択したつもりである。また、誰もが知っている顔がある一方、名前だけでその実人生は未紹介という人物、さらには本邦初という名前もあり、その意味でもバラエティーに富んだ総勢 23 名の顔ぶれとなっていると思うが、いかがであろうか。

各章は執筆者 23 名のそれぞれの関心、感性で描かれており、全体的な統一に欠けるきらいがあるかもしれない。「一般論的なステレオタイプ化された女性像ではなく、個としての赤裸々な生き方をその時代のコンテクストで読み解き、その女性の生きた時代や世界を従来のとは異なった角度から見通す」という原則さえ守られていれば、それもとよと考えたからである。そのほうが各執筆者が各自の思い入れのほどを自由に示すことができるだろうとの判断である。その甲斐あってか、ここに選んだ女性が魅力的であるからなのか、かなり個性的な書物に仕上がったと編者は自負している。会員諸兄の忌憚りの無い批評をお聞かせ願いたい。本書がスペインをさまざまな角度から知る一助となってくれば幸いである。

まだまだスペインには興味深い女性が多数忘却のなかに埋もれている。第二、第三の女性群像の企画が俟たれる。その前に今秋出版予定の本書の姉妹編『ラテンアメリカの女性群像』も期待していただきたい。

【原稿募集】

本誌『会報』の原稿を募集しています。下記のような項目など特に分野は問いません。スペイン語圏に関する原稿をどしどしお寄せください。

- 国内外の学会の案内と報告
- 国内の学術講演会および行事の案内と報告
- スペイン語圏に関する新刊書（和書・洋書）の紹介
- その他

（使用言語：日本語もしくはスペイン語）

（原稿分量：原稿用紙四百字詰 1000～1400 字）

【新刊紹介】

牛島信明著『ドン・キホーテの旅』（中公新書、2002）

片倉 充造（天理大学）

17 世紀に刊行されたセルバンテスの『ドン・キホーテ』は、聖書につぐ世界的・歴史的なベストセラーだが、何しろ長編であることや表現が古めかしいことなど、現代人には敬遠されがちだ。それでも先年の調査ノルウェー世界文学百選（「読売新聞」2002.5.9）によると、同じスペイン語圏のノーベル文学賞作家ガルシア＝マルケス（1928-）『百年の孤独』（1967）も及ばない堂々の首位に君臨する。この長大な傑作を「一般の読者に近づけるという意図」（「あとがき」）で書かれたのが本書であり、そこには大作と 40 年間近く向き合い、ついに『新訳ドン・キホーテ』（岩波書店、1999）まで刊行した著者の学究としての矜持が窺える。目次が読者の好奇心に応える見出しであふれ、10 章構成の本文のどの頁を開いても実に楽しい。

「第 3 章 何が新しいのか」では、「セルバンテスにあっては書くこと、つまり小説を作るという営為が絶えず反省され意識化されて」とあり、作家が無類の本好きであると同時に相当の書き手であったことに注目する。ちなみに 2002 年秋の奈良新聞主催講演会でも、直木賞作家林真理子氏が幼少時より「書く」ことへの情熱が高かったと同様の回顧をしていたことが想起される。

「第 6 章 サンチョ・パンサの冒険」では、ドン・キホーテの狂気（「異人」を前にした時の対応）を、忌避/同情/不快/愚弄に区分し、従士サンチョを格好の理解者と規定、現実主義と理想主義という双方の立場を出発点に、対立・葛藤・止揚を経て、キャラクターが融合すると解説する。

圧巻は表題とも言える「第 7 章 旅人ドン・キホーテ」「同行二人」の項、「ドン・キホーテは現実の空間を踏破しながら、頭の中では過去の文学空間を生きている。ドン・キホーテの旅は時間と空間の融合したもの」との見解であり、現実の空間ではサンチョと、時間の旅では騎士道文学のアマディス・デ・ガウラとの二人旅であったと論述する。

「第 9 章 放浪のアンチ・ヒーロー」は、寅さんとドン・キホーテの異同について検討、ポスト・モダンの人=車寅次郎=ドン・キホーテ（“ルネサンス文学の化身”）=新しき人という図式で、両者をともに近代合理主義を超越した存在と称揚する。この章は別けても、京都セルバンテス懇話会第 3 回大会で、著者牛島先生に特別講演《新しき人ドン・キホーテ》（2000.3.23. 於天理大学）を飾って頂いたその発表原稿がほぼそのまま掲載されている。

おわりに、同先生は昨年師走にわかに天上界へ旅立たれた。文豪セルバンテスやスペイン演劇のロペ・デ・ベガ他とも「文学の対話」を満喫されることだろう。



新刊案内 (2002.3.-2003.7.)

- 2002.3.23. クリス・スチュアート (くぼたのぞみ訳) 『アンダルシアの農園ぐらし』
DHC
- 2002.6.15. 立石博高・中塚次郎編『スペインにおける国家と地域—ナショナリズムの
相克』国際書院
- 2002.7.1. 中山瞭『スペイン街道物語』JTB
- 2002.7.5. 西垣通『1492年のマリア』講談社
- 2002.9.25. 大江健三郎『憂い顔の童子』講談社
- 2002.10.20. 山本益博『エル・ブリ 想像もつかない味』光文社新書
- 2002.10.31. 野々山真輝帆『スペインを知るための 60 章』明石書店
- 2002.11.1. 京都セルバンテス懇話会編『イスパニア図書』第 5 号、行路社
- 2002.11.10. 中丸明『スペインうたたね旅行』文春文庫
- 2002.11.18. 川成洋『スペイン歴史の旅』人間社
- 2002.11.25. 牛島信明『ドン・キホーテの旅—神に抗う遍歴の騎士』中公新書
- 2002.12.10. 逢坂剛『幻の祭典』文春文庫
- 2002.12.15. 後藤政子『キューバを知るための 52 章』明石書店
- 2003.1.10. 明比淑子『シェリー、ポート、マデイラの本』小学館
- 2003.1.29. 逢坂剛『幻のマドリッド通信』文藝ネスコ
- 2003.2.25. ヘイス・ファン・ヘンスベルヘン (野中邦子訳) 『伝記 ガウディ』文藝
春秋社
- 2003.2.25. 相田洋『航海—移住 31 年目の乗船名簿』NHK出版
- 2003.2.28. 杉浦勉・鈴木慎一郎・東琢磨編『シンコペーション ラティーン/カリビ
アの文化実践』エディマン
- 2003.3.3. 西川和子『狂女王ファナースペイン王家の伝説を訪ねて』彩流社
- 2003.3.10. 松浦喜代子『日系ペルー人 おてちゃん一代記』論創社
- 2003.3.20. 佐竹謙一『浮気な国王フェリペ四世の宮廷生活』岩波書店
- 2003.4.5. 安藤まさ子『アルハンブラの誘惑』実業之日本社
- 2003.4.20. 関哲行『スペインのユダヤ人』山川出版社
渡辺和行『フランズ人とスペイン内戦』ミネルヴァ書房
- 2003.4.25. 江藤一郎『基本スペイン語文法』芸林書房
- 2003.4.30. 鈴木康久『メキシコ現代史』明石書店
中川清/児玉悦子『わかるスペイン語単語』同学社
- 2003.5.25. 高橋博幸・加藤隆浩編『スペインの女性群像—その生の軌跡』(イスパ
ニア叢書 10) 行路社
- 2003.6.12. ジュステ、ベナビデス、橋本、坂東『スペイン語技能検定によく出る基本
単語』南雲堂フェニックス
- 2003.6.20. 戸月十月『カストロ、銅像なき権力者』講談社
- 2003.6.30. 牛島信明編訳『スペイン黄金世紀演劇集』名古屋大学出版会
- 2003.7.7. 川成洋『スペイン戦争 青春の墓標—ケンブリッジの義勇兵たちの肖像』
東洋書林
- 2003.7.10. 川成洋『スペイン内戦—政治と人間の未完のドラマ』講談社

国際会議のお知らせ

(国際会議に出席される方は帰国後、「国際会議報告書」を会報にご寄稿下さい。)

CONFERENCIA INTERNACIONAL SOBRE LINGÜÍSTICA COGNITIVA EN ESPAÑA

20-25 de julio de 2003

Lugar: La Rioja

Correo-e: francisco.ruiz@dfm.unirioja.es

<http://www.unirioja.es/dptos/dfm/sub/congresos/LingCong/>

XXII ENCUENTRO NACIONAL DE DOCENTES E INVESTIGADORES DE LA LINGÜÍSTICA

29 de julio al 1 de agosto de 2003

Lugar: Santa Ana de Coro (Venezuela)

Correo-e: ENDILXXII@hotmail.com

XIV CONGRESO INTERNACIONAL DE ASELE

10-13 de septiembre de 2003

Lugar: Burgos (España)

Correo-e: aalva@ubu.es - congreso.asele@ubu.es

<http://www.ubu.es/convocatorias/congresos/as/e/e/index>

X CONGRESO BRASILEÑO DE PROFESORES DE ESPAÑOL

16-20 de septiembre de 2003

Lugar: Natal-RN (Brasil)

Correo-e: abcbarreto@digizap.com.br

VI CONGRESO INTERNACIONAL DE HISTORIA DE LA LENGUA ESPAÑOLA

29 de septiembre al 3 de octubre de 2003

Lugar: Madrid (España)

Correo-e: chle@filol.ucm.es

<http://www.ucm.es/info/cihle/>

VI CONGRESO INTERNACIONAL DE LINGÜÍSTICA HISPÁNICA

29 de septiembre al 2 de octubre de 2003

Lugar: Leipzig (Alemania)

Correo-e: wotjak@rz.uni-leipzig.de

CONGRESO SOBRE HISTORIOGRAFÍA LINGÜÍSTICA

22-25 de octubre de 2003

Lugar: La Laguna, Tenerife (España)

Correo-e: cohisgra@ull.es

<http://webpages.ull.es/users/cohisgra>

V CONGRESO INTERNACIONAL CERVANTES Y EL TEATRO

17-19 diciembre de 2003

Lugar: Florencia (Italia)

Correo-e: theatralia@poetic.com

mariagrazia.profeti@unifi.it

XV CONGRESO DE LA ASOCIACIÓN INTERNACIONAL DE HISPANISTAS

19-24 de julio de 2004

Lugar: Monterrey (México)

<http://humanidades.mty.itesm.mx/congresoAIH>

<http://www.dartmouth.edu/~aih/>

【事務局より】

《会員の異動》

新入会員

Almaraz, Manuela (清泉女子大学)

研究テーマ：外国人のためのスペイン語教授法

[Redacted]

乾 隆政 (法政大学社会学部)

[Redacted]

黒野 喜久子

研究テーマ：Mariano Azuela の *Los de abajo* と Juan Rulfo の *El llano en llamas* について

[Redacted]

下田 幸男 (立教大学)

研究テーマ：使役動詞構文における再帰代名詞の出現

[Redacted]

高岡 麻衣

研究テーマ：ラテンアメリカ文学、特にホルヘ・ルイス・ボルヘスについて

[Redacted]

前田 貞博 (住友商事(株))

研究テーマ：80年戦争スペインとネーデルラント

[Redacted]

松井 健吾 (東京外国語大学大学院地域文化研究科)

研究テーマ:スペイン語のいわゆる心理動詞に用いられる接語の格形式選択における揺れの現象(対格/与格)



林 みどり(明治大学政経学部)

研究テーマ:専門は「ラテンアメリカ思想史」、とくにアルゼンチンの19世紀から20世紀前半にかけての言説分析。ただし、現在は「都市空間における記憶」をテーマに「アルゼンチンの軍政期の記憶の社会化をめぐる諸問題」や、「看視都市社会の侵犯・公共空間への記憶の刻印としてのグラフィティ」といった現代的テーマを扱っている。



退会者

加藤 正泰、吹上 光恵、José Luis Millán

物故者

牛島 信明、橋本 定久、Héctor Rueda de León

【編集後記】

「会報」第6号をお届けいたします。第5号でお約束しましたように、牛島信明先生の追悼文が立林良一先生と竹村文彦先生のご両名から寄せられましたので、掲載しました。2年後の2005年には『ドン・キホーテ』前編が刊行されてから400年目に当たる記念の年を迎えます。明治時代に始まった『ドン・キホーテ』の翻訳と研究の歴史が、日本人の間でも広く語られる年になればと願うばかりです。今号から、新刊書と国際会議の案内を開始しましたのでご覧下さい。興味深い新刊書がありましたら800字程度でご紹介下さい。また、国際学会に出席される方々の「学会報告」のご寄稿もお待ちしております。来年2004年の学会は南山大学で開催を予定しておりますが、日本イスパニア学会創立50周年の記念の年に当たり、スペイン王立アカデミー会長の来日が実現します。学会が新たな時代の第一歩を踏み出す記念大会になることを祈るばかりです。(坂東省次)